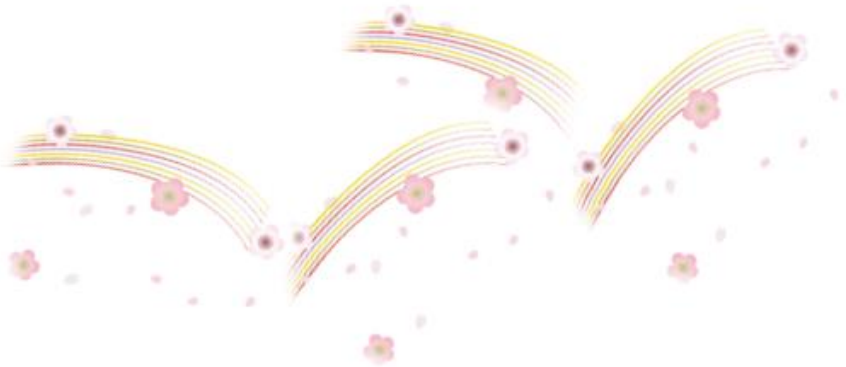
明石の史跡（１５）足代弘訓と魚住中尾村



天明４年（１７８４）１１月２６日、伊勢外宮の禰宜の家に生まれた足代弘訓（あじろひろのり）は、他界した父にかわって、家督相続したのが１７歳。その後、荒木田久老に始まり、本居太平（おおひら＝宣長の養子）・春庭（はるにわ＝宣長の長男、のち失明）に国学を、ついで律令や和歌・有職故実を学び、上方にとどまらず江戸にまで足を伸ばし、多くの学者と交わり、見識を高めた。天保の大飢饉には、窮民救済につくし、大塩平八郎とは親交を深めていた。そのため大塩の乱の時には、大坂で取り調べを受けている。嘉永６年（１８５３）のペリー来航後は、有志と接点を持ち、吉田松陰が再度にわたって、弘訓を訪ねている（国史大辞典１）。

江戸時代最後の式年正遷宮となる、嘉永２年（１８４９）を２年後に控えた弘化４年（１８４７）１０月２５日、弘訓は魚住中尾村役人等にたいし、書状でもって、式年正遷宮の寄付金を募っている（西海勝也所蔵文書）。ただそれに続けて、弘訓の自宅が老朽化したのか、目下、分家（勝大夫）に寄宿しており、老年になって自宅がないのは心外と考え、遷宮までに拙宅が完成するよう、助力を要請している。そして遷宮にたいする寄付金は、当座の必要経費を申しうけ、余金は自宅の普請に取り掛かるまでは、預けて置きたい。

諸国よりの寄付金を記帳の上、普請に着手したいという。委細は樋口金平という人物に申し含めているので、よろしく御聞き取り頂きたい。

何のことはない、遷宮の寄付にかこつけて、自宅の建築資金も・・・と願っている。高名な国学者の一面を垣間見たような気持ちである。寄付を依頼された中尾村は、この頃擂鉢生産において、繁盛していたから、おそらくこの要望には応えたことであろう。

日本歴史学会会員 茨木 一成